

「聞き書きでよみがえる『能登に生きる』人々の風土」

—人の回復力の賦活を考える—

疋島 啓子	(医学部保健学科看護学専攻 3年)
丸山 佳苗	(医薬保健学域保健学類看護学専攻 2年)
池上 暁	(医学部保健学科看護学専攻 3年)
山田 奈津子	(医学部保健学科看護学専攻 4年)
木下 淑恵	(医学部保健学科看護学専攻 4年)

指導教員

榊原 千秋 (医薬保健研究域保健学系地域・環境保健看護学分野 助教)

I. 研究の背景

医療保健福祉従事者を目指すものにとって、人の話を聞く力及び聞いたことを書く力を身に付けることは重要である。「聞き書き」は、語り手と出会うための交渉からはじまり、語り手との信頼関係を築き語り手の声に耳を傾け、その人生を綴っていく。高齢者や障がい者の立場に立って考えるとその人の主体性を再び取り戻す～Resilience～につながると言われている。医療保健福祉従事者に共通することは、ケアすることである。作家の小田豊二は、ケアを「世の中の日常の生活の話を聞くこと」で「話をする」がケアそのものであるといっている。また、「聞き書き」は、語り手が生きた時代の風土や文化も含めた個々の生きざまが語り手の言葉で残されるとともに語り手にとっても貴重な一冊となる。

II. 研究の目的

「聞き書き」とは、ひとりの人の人生の語りを聞き、語り言葉で記録し残していくことである。本研究は、聞き書きの手法を学ぶこと、能登半島で暮らす高齢者の人生の語りを聞き書くことを通して、語り手の生きてきた道のりを辿りながら、「能登に生きる」「老いに生きる」「病いをもって生きる」ことの意味を語りの中から見出していくことを目的とする。

III. 研究の実践と結果

聞き書きの実践は学習期、実践期に分けられる。それぞれについて学んだことを述べる。

1) 学習期 講座の開催、学内外での学習・活動参加

平成21年4月から7月には、講師に聞き書き作家の小田豊二氏を迎え医療保健福祉従事者のための「聞き書き講座」(全3回)を企画・運営し、聞き書きの実践能力を得た。同じ時期地域の医療保健福祉従事者を中心に、聞き書き長屋が立ちあがった。小松市寺町の聞き書きを通じて交流を深めた。また5月には学内で行われた講演をきっかけに、難病で重度の障害を持った北岡幸美さんとの交流の機会を得た。8月には、能登半島地震で被災を受けた方々の中でも女性の立場での体験を聞く機会を得た。さらに、学内及び湯涌温泉でドキュメンタリー映画から当事者の声を形にする一つの手法を学んだり、湯涌で生活する人びとの歴史を学ぶ機会を得た。

【地域の聞き書きサークル「聞き書き長屋」との交流】

①目的と方法 医療保健福祉従事者を中心とした「聞き書き長屋」のメンバーと共に小松市寺町において高齢者5名の方々の聞き書きを一緒に行った。高齢者の接し方や具体的な聞き書きの方法を「聞き書き長屋」のメンバーから学ぶ。

②学んだこと 一つの町で暮らす高齢者の聞き書きを行うことによってその町の歴史や文化を学ぶことを目的に聞き書きを始めた。地域の祭りや昔の町の姿、遊びの話だけでなく、家族や友人の思い出など高齢者の一人ひとりが大切にされており、語りたいことは個々によって違うということが分かった。

【難病を持った女性との交流】

①目的と方法 学内で行われた講演会で20代の難病を抱えている女性の生き方を学ぶ中で、ひとりの人として出会い、同じ時間を過ごすことで、お互いの思いを共有することを目的に交流を図った。食事会やバーベキューなどの交流会を通して、難病を抱えて生きるという生活の実際を知り、障がいとはどういうことか難病の医療保健福祉の現状についての思いや考え課題や取り組みについて語り合う。

②学んだこと ひとりの人として友人として出会った。同年代の女性としての悩みや本音は同じである。難病を持っているからこそできることや強さを学んだ。難病を抱えて生きることの持つポジティブな側面を学ぶことができた。

【能登半島地震の女性被災者の聞き書き】

- ①目的と方法 将来、医療保健福祉の分野で専門職を目指す、保健学域看護学専攻の学生と地域創造学科の社会福祉士をめざす学生の視点から聞き書きを実践することを目的とし、地域創造学科の社会福祉士をめざす学生2名、看護職を目指す学生との交流をはかったうえで、女性被災者の方2名の聞き書きを実践した。

- ②学んだこと 能登半島地震での女性、母としての苦労や復興への思いについて学んだ。

【湯涌茅葺屋根での高齢者の聞き書き】

- ①目的と方法 ドキュメンタリー映画から今を生きている高齢者の人生を深く理解するために、上映会を開催した。その中で上映会に参加した湯涌の70代の男性3名の聞き書きを行った。小田豊二先生の聞き書き実演、指導も受けた。

- ②学んだこと 活動を通じて、湯涌の地域の方々に会うことができた。湯涌地区の昭和初期の自宅分娩や自宅での看取り、野辺送りなど民衆の文化や歴史について学んだ。

2) 実践期

【奥能登の高齢者の聞き書き】

- ①目的 自然や伝統・文化との調和を図りながら「奥能登に生きる」高齢者のお話を聞き、失われつつある能登の風土や文化を聞き書きの記録として残すことを目的とした。

- ②方法 日時：平成22年3月2日、3日の2日間、
場所：能登町特別養護老人ホーム第二長寿園

学生7名と教員2名、講師1名で訪問し、デイサービスに通所する80歳代の高齢者7名と施設入所の80歳から90歳代の高齢者7名に「聞き書き」を行った。



③能登町（のとちょう）の概要

能登町は、能登半島の北東部に位置し、北は珠洲市と輪島市、南西は穴水町に隣接し、東と南は富山湾に面して海岸線が続いている。特に東側の海岸線は屈曲に富み、天然の良港を形成し、山、川、海の豊かな自然環境に恵まれている。気候は、日本海特有の四季が明瞭で、冬季の降雪が多い。本地域は、自然の恵みへの感謝の気持ちや神への信仰心が篤く、祭りが各地区で盛んに行われ、地域住民のつながりや愛着が深い地域である。

④特別養護老人ホーム第二長寿園の概要

第二長寿園は、社会福祉法人長寿会の施設である。波路静かな内浦海岸に面し、人とふれあい、住みなれた居心地のよさのなか自立生活を支援する暖かなホームとなっている。従来型とユニット型の特別養護老人ホームの他に、短期入所生活介護センター、居宅サービスセンター、訪問介護サービスセンター、在宅介護支援センター、デイサービスセンターが敷地内に併設されている。入所されている方の平均要介護度は3.5、平均年齢は86歳となっている。

⑤実践内容

高齢者の語りは本人の許可を得て、テープに録音した。その後、語り手の語る内容やその時の情景を思い浮かべながら、テープ起こしを行った。このことは、聞き書き実践では、「憑依」「表現模写」といわれ、大切なプロセスである。語り手の言葉でその言葉を綴り、1冊の聞き書き本を作成した。実際に行った、聞き書きと学びについて以下に示す。



「おらのこどもの時分の話はむかしばなしになってもた」 語り手 自称 115 歳男性
聞き手 池上 暁

【聞き書きの状況】

出会いは、聞き手選りから始まった。誰にお話を話すか語り手に決めてもらおうというユーモアからでのことだった。やさしい日差しのある廊下の一角。ソファにのんびりと腰掛けて、お話を交わした。

「最近楽しかったことは何ですか」「いつ頃生まれたのですか」の問いに明るく答えていただくうちに、だんだんと小さな頃のお話を始められ、どんどんとやさしい笑顔になり、冗談も言いながら私を楽しませてくれた。話が終わったとたん、それまでの笑顔が消えてしまった。

「勉強せえ、勉強せえ」より

おりゃあ、立派なもんでないぞおう。学校は高等小学校しか出とらんのかきやあ。子どもの時分から一緒やったんは一年から六年まではあ普通の教育、尋常教育つてあ、もう、八歳になったら学校行かんなんがや。ほってえ、八、九…十三のときにやあ卒業やちゃ。（中略）

たいがいのもんなあ、尋常小学校出れば京都へ出稼ぎやちゃ。尋常は、六年あつたんやけども、おらの親のかきやあ、四年しかなくてんと。ほやさかいにね、田舎へでも手紙だすとかきやあ、人に書いてもらわんだら出されんがや。尋常四年しか出とらなんだら、書かれとかきやあ。ほやさかいに「勉強せえ、勉強せえ」つて。なんでこんなやかましいこと言うげんろと思ってよう聞いたらあ、京都へぎょうさん出稼ぎにいかんなんがやさけえ、父にでも、母にでも、はがきをだすとかきやあ、人に書いてもらわな出されんさかいにてやかまし言うたんや。

「人生の中で1番の思い出」

語り手 84 歳女性（畑仕事）
聞き手 木下 淑恵

【聞き書きの状況】

外からの光が窓から差し込み明るくあつたかい。丁度、昼時で施設の方々が昼食の準備をしており、調理の心地よい音が聞こえ、部屋全体に昼食のいいにおいがしてくる。私は語り手の左に寄り添い何度か手を握り、語り手のあたたかいぬくもりに触れた。祭りのキリコの話の時、声が弾んで、トーンが高くなり、次々と言葉があふれてきた。私は語り手がお祭りのキリコが本当に好きなんだと感じた。

「ありますよ！キリコ祭でいったってねー。スゴイですよ。各町内に一つずつ出て、夜は電気点きまして、提灯燈してね。すごい、にぎやかになるんです。人形が、他の部落にない人形。それぞれ作って。何を作るか、言われないからんです。そうそう。それをこっそりと見に行つて、あそこの部落はこれを作つたって、見に行くねねが子供の役目だつたんや。一緒に作つたら、面白くなうから。お互いに見に行つたりして。きりこ？大きいですよ。うん。ほやね。高さは二軒半ほどあるかな。電信柱あるでしょ？それひっかかるでしょ？ほやから、行く途中に、竹の棒でみんな電線上げて、そして通れるようにして。段々それが小さくなってね。若い人もおらんようになったからね。祭もちよつと、やっぱり変わつて。昔の方がよかったね。

⑥奥能登での聞き書きから学んだこと

奥能登の人は、一般に人情が厚く、忍耐強い人が多いと言われている。聞き書きをさせていただく中でもそのように感じる事が多くあつた。奥能登では春から秋にかけては農業や漁業・林業に従事していた人が、冬には雪が降って仕事ができなくなると、大勢が出稼ぎに行き、その中には、酒造りの杜氏も多く含まれ、能登半島の先端である珠洲市の周辺は江戸時代から杜氏の里として知られている。聞き書きによって語られた出稼ぎの語りは、出稼ぎ先での楽しい青年時代の情景が浮かんでくる作品であり、希望を持って生きる姿が満ち溢れ特別な記録となった。お話を聞く中で対象にどんどん興味や関心が湧き、自分たちの体験からは想像もつかない時代や人生を歩まれてきたことを共有し感動した。このことから高齢者に出会う中では個々に「話したいこと」が溢れており、私たちは聞き書きによって高齢者に

対し、生きていることに敬意をはらえるようになったと感じている。高齢者が今大切にしていること、これまで大切にしてきたことの原点は家族への感謝の気持ちであったと感じた。このことは、自分たちも過去を振り返り、「今」を大切にし、また、今後どのように生きていきたいかを考えるきっかけとなった。

IV. 考察

1、能登に生きる人々の風土と文化

1) 方言

能登半島先端部の方言には、「～ノキャ」「～ワキャ」などの独特の文末表現が聞かれ、特に高年層のこの方言は北陸の中でも珍しいと言われている。発音にも音声的特徴があり、京都の古いアクセントに似たものがあるなど能登の方言は一種独特な文化的特徴を持っている。聞き書きは相手の言葉をそのままに聞き書くため、能登の方言がそのままの形で表現されている。言葉は時代によって変化するが、聞き書きによって、語り手が生きた時代、能登の方言を記録し残しておくことができる。

2) 出稼ぎ

奥能登出稼ぎの村の文献によると昭和初年から 10 年頃には、十五、六歳になる者のうち、補修学校に進む者もあったが、多くはある時期、京都や大阪などのハタラクに出るのが普通であった。その頃の若者は、ハタラクにでて帰ってくるのが普通のこととされていた。また、同じ年頃の女性の場合は、親が止めても都会にあこがれる気持ちからハタラクに出たがり、多くは実際にハタラクに出たことが明らかになっている。このことは今回聞き書きでも同様のことが語られた。生き生きとした文脈から、当時の希望に満ちた楽しい感情を読み取ることができる。

3) 祭り

出稼ぎを終えて春に帰ってきた人々は奥能登に出稼ぎ先の文化を持ち帰った。また、日本海沿岸航路において北前船とよばれた「北のものを南に」「南のものを北に」運んだ商人および船によっても他の地域の文化が持ち込まれた。そのひとつが宇出津のあばれ祭りだそう。祭りにキリコは欠かせず、地域の人々にとって、祭りは幼い頃から慣れ親しみ、大人になっても心を熱くさせる思い出であり、郷土自慢の一つである。祭りは子供が地域社会に参加する最初のものであり、コミュニティへの愛着の育みにつながっていた。高齢者は祭りを語ることでその時の情景、共に過ごした家族・友人の姿、祭り当日までの熱気までも蘇り、胸を熱くし語った。

今回、能登半島で暮らす高齢者の聞き書きを行い、語り手の生きてきた道を辿りながら、能登の伝統を垣間見ることができた。これらは奥能登の残したい風土そのものである。

2、聞き書きは傾聴とどのように違うのかと問われることがある。また、記録という点では看護経過の中でよく活用されるプロセスレコード類似しておりその比較について考察していくことで聞き書きの独自性について考察する。

1) 聞き書きと傾聴

傾聴とは、「こちらの聞きたいこと」を「聞く」のではなく、「相手の言いたいことを、伝えたいと願っていること」を受容的・共感的態度で「聴く」ことであり、相手が自分自身の考えを整理し、納得のいく結論や判断に到達するよう支援することと定義されている。そのため聞き書きにとって傾聴の姿勢は基本である。聞き書きのプロセスの中では、語りやコミュニケーション場面での振り返りを繰り返す行うこと、相手の話したいことを引き出すという傾聴の技術や自己の態度について振り返ることができ

る。聞き書きは、より実践的にそのことを学んで行くことができる。また、聞き書きは、語り手の語り
で一つの作品を完成させ、語り手だけでなく家族や友人とも共有できるものとなる。さらにそれらの記
録は、庶民の歴史や知恵を残していくものになる。

3、聞き書きとプロセスレコード

プロセスレコードとは、ヒルデガルド・ペプロウ（1952年）によって提唱された患者とのやりとりを
出来るだけ正確に再現してみようという方法であり看護の領域でよく活用される。ペプロウはさらに、
「患者の成長は看護師との対人関係が発展する中で徐々に成し遂げられ、その過程で看護師自身も患者
とともに成長していく」と述べている。プロセスレコードは、看護師と患者の間に生じている対人関係
の中で、患者の発達課題が浮かび上がり、患者がそのことに気づき、その課題に取り組み、それを看護
師が援助していく過程を明らかにするためのものであると言っている。一方、聞き書きは、語り手と聞
き手という対人関係の中で、相互に成長できるものであり、特に高齢者にとっては回復力の賦活～
Resilience～につながる。

【結論】

1. 聞き書きは、語り手に聞いて書くという過程を経ることで「聴く」力を向上させることができる
2. 聞き書きは、私達の記憶だけでなく、その記録を1冊の本として残すことで、聞き手語り手双方で
けでなく、語り手の家族、後世の人々と共有できるものになる。
3. 1.2をとおしてその人になりきるという体験をする。
4. 聞き書きは対人関係の中で語り手と聞き手がお互いに成長するものである。
5. 聞き書きは私たちに人を敬うことを実感できる。
6. 聞き書きは語り手のいきいきとした姿を引き出せるきっかけとなり、回復力の賦活につながる。
7. 学生は、聞き書き講座の企画・運営や、地域住民との交流をとおして多くの方々と出会うこととな
り、「交渉力」を身につけることができた。

V. 今後の展望

聞き書きは医療保健福祉従事者を目指す学生にとって、地域の方々と出会うことができるひとつの方
法である。語り手の人生に寄り添うことで、自らが成長し、地域と高齢社会に果たす役割を明らかにし
ていくことができる。また高齢者にとっても回復力の賦活～Resilience～につながり、語り手・聞き手
の双方が共に成長することが出来る。今後さらに、学生自らが主体となって学域や学年を超え、患者や
家族・専門職と共に学び語り合う機会を持つことで学生の視点が活かされた新しい地域の医療・保健・
福祉のかたちを創造していくことが必要と考える。

VI. 謝辞

本研究を進めるにあたり、聞き書きの実践を理解し、ご協力くださった施設の皆様、快くお話しをして
くださった語り手の皆様、聞き書き実践のプロセスを通じて熱心にご指導くださいました小田豊二先生、
天野良平先生、榊原千秋先生に心より感謝申し上げます。

VII. 参考文献

- 1) 波平恵美子：「暮らしの中の文化人類学 平成版」1999年 出窓社
- 2) やまだようこ：「人生を物語る一生成のライフストーリー」2000年 ミネルバ書房
- 3) 鷲田清一：「「聴く」ことの力ー臨床哲学論ー」1999年 株式会社阪急コミュニケーションズ
- 4) 口武徳 大月隆寛 黒川俊彦：「奥能登出稼ぎの村ー石川県珠洲市若山町ー」P117ー141
- 5) 能登町ホームページ <http://www.town.noto.ishikawa.jp/www/index.jsp>
- 6) 小田豊二：「聞く技術・書く技術」：2009：PHP 研究所